桃割れのタイピスト

続おりん母子伝

松田解子

続 おりん母子伝

桃割れのタイピスト

松田解子

松田　解子（まつだ　ときこ）

1905年，秋田県荒川鉱山に生まれる。
日本民主主義文学同盟員，詩人会議会員，
日本文芸家協会会員。
主な作品
「女性苦」，「女性線」，「町のなかで」，「地底の人々」，
「おりん口伝」，「おりん母子伝」，「疼く戦後」，「また
あらぬ日々に」，「坑内の娘」（詩集）など。

桃割れのタイピスト——続おりん母子伝

1977年7月25日　初　版

著　者　松　田　解　子
発行者　松　宮　龍　起

郵便番号 112　東京都文京区大塚3の3の1
発行所　株式会社　新日本出版社
電話　東京（945）8511
振替番号　東京3—13681
印刷　鎌倉印刷株式会社　製本　古賀製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします

桃割れのタイピスト

続　おりん母子二

装丁　吉井忠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一　章

一

「ほら、下駄ぬいで、ぞうり穿いて」

たまらなくいい匂いを頭と背広の背中からひろに散らしながら男はいった。

ひろは息を詰めながら、男のいうとおり、いま踏みこんだばかりの鉱山事務所玄関の三和土で赤緒の下駄をぬぎ、片手にかかえて来た、これも赤緒のぞうりをはいて、ひと足そこの床板へのぼりかけると、先に立ったその男は、すぐ左手にみえる衝立のこちらの角柱の前に立ちどまった。見るとその角柱には箱入りの電話器が打ちつけられ、男が立ちどまったこちらがわには小机がおかれていて、その上には白い厚表紙のついた帖面がのっていたが、男はそこで厚い方の帖面の最初のページをめくると、すばやくポケットへ手を入れてハンコを出し、黒塗りの丸い容器にはいった印肉に、念入りにハンコのさきをおしつけて、線が引かれた帖面の右端から四、五番目あたりの名前の上の日附らんへ、上体を少しかけるようにして捺していた。捺してしまってから、うすいほうの一冊を、自分でひらいてひろをふりかえり、

「ハンコ持って来てるな。さ、ここに捺した。おまえの名が書いてあろうが」

と、いった。

「あろうが」と、ひろは男の言葉を心のなかで口まねした。そして、ある、ほんとうに、ここにおらの名が書いてある。ここの年寄り小使の松前さんや、おらの一級上で去年からつとめ出した木内や、おらといっしょにこのあいだ高等科卒業した殿村の名前とならべて、……と、ひろは思った。……ンだども鉱山事務所では、いつ、ここにおらの名前まで書いたんだろうか。おらがこの事務所さ働く決心をしたのは小貫親爺さんが担架でかつがれて来たあとで、そのこと金田巡視の家さ、いいにいったのは、つい、昨日のことなのに、と、心づくと、ひろは自分の体が、自分の心とは関係なく、何十日もまえからこの事務所へ、見えな

い何かでくくりつけられてでもいたような、やり場ない息苦しさをおぼえた。

だが、男は、ひろがおどおどと、しかし、まちがいなく自分の名の上の日附らんに、そのあわれな三文判を捺したとみると、

「よし、捺したら、こっちぃ来る」

そう命じて、靴音も高く、そこから左手奥へと歩き出した。

「おはようごあんす」

するとすぐにも、ふたりの背後になった受付窓のよこの机から、金田巡視頭の声がした。金田以外に社員たちはまだ出勤していない。

「おはよ」

男がこたえ、ひろは黙って男につづいたが、そこは一方を壁と書類棚とガラス窓で、他の二辺を厚板の衝立で、のこる一辺を大きなガラス戸のはまった本棚と、鉱山長室へのドアでふさいだ一郭で、この一郭こそは事務所のなかでも日頃鉱夫たちからもっとも恐れられ忌み嫌われている庶務係の部屋であり、ひろのさきに立った男が前任の早野のあとに来た新しい庶務主任であった。——この庶務主任は上島豊というんだ。あの帖面にそう書いてあったから。そしてこの庶務主任にはこの間、東京から、とってもきれいな、うんと若い、上品な奥さんが来たんだ。そうして大直利橋をみおろす主任社宅に、どこかの婆さんをばあやにたのんで、三人で、しずかアに暮してるんだ。……

ひろは自分が見たきれいな奥さんと、大人たちから聞きばさんだ噂をつきまぜて、そう自分にいいきかせ、主任がすすむとおり、その部屋の左側——壁と書類棚とガラス窓寄りのほそい隙き間を、反対側の机や椅子や火鉢などにぶつからないように気をつけながらすすんでいった。そして主任が、その行き止まりにどっしりと立った本棚の手前の、ひときわ大きな机の上に、かかえていた皮鞄をおいて、すぐ左側の窓ぎわの、一段たかくなっている台床へあがるのを、息も止まるばかりの緊張で、みつめていた。そうしてみつめながら、ひろはその主任が、いつか母のりんがタンパン場へころげ落ちて死にかけたあげくクビになり、扶持米までもらえなくなったために、自分と千太兄がおおぜいのお母ァたちに守られてこの事務所へ、「扶持米ッ呉でけれ」と頼みに来たときの早野という庶務主任でなくてよかった、……そればかりか、あのときの副主任も転任になっていてよかった、と、しみじみ思い、ほっと太息を吐き出した。

が、そのときひろの鼻先で、上島の背広の背が、なにやら頭の芯にこたえてくるような、きつい香水の匂いを吐いて今更に波立ち、かれの右手がポケットのなかをちゃらちゃらいわせながら、おびただしい数のカギの束をとり出したとみると、そのひとつの小カギが、かれの手で、台床の上の一風かわった机にかぶさった蛇腹状の掩い蓋の小さなカギ穴にさしこまれ、とたんにその、まっ黄いろいニスでぎらつく掩い蓋が蛇腹を折りたたんで向うへ消えたと思うと、そこには一台の、まぶしいばかりに照り輝く小型機械が現われ出た。ひろは、息を呑んだ。「……その機械は、な、パイプライターだか、タイプライターだかといって、……」それはあの晩、小貫おどさんが、ひろたち母子の怒りのまえで男の戦(おの)きをかくしもせず告げた、あの機械にちがいなかった。ひろは呼吸をこらし、いまにも弾け出しそうな緊張で見つめていた。

上島がはじめて、うしろに立ったひろをふりむいていった。

「ほら、ここに書いてあろうが。日本タイプライター株式会社……邦文タイプライターとな。きょうからおまえはこの機械をならうんだ。……ほら、この文字盤の下にも、こんなに予備の活字がある。それからこの下の引出しには、教科書や表や、いろんな道具がはいっているが、まずこの文字盤の字をおぼえるんだな。これが、ほら、活字表だ。これだけで約三千字ある。文字盤のとおりにならべた表だから、まず、これから先におぼえたほうがいいだろう。いいな？」

主任はいったが、ひろは緊張で体の芯まで熱くなり、生まれてはじめての、そのハイカラな、むしょうに光り輝く機械のまえに恍惚となって、やっと、蚊の鳴くような声で、「はい」と、返事をした。

主任が台床をおりて自分の机にむかっていた。

ひろがタイプライターの前に残された。

――まず三千字をおぼえなければならない。「椅子はぐっと前にひいて腰かけて、――」

ひろは一年生のときに教わった鈴木トク先生の言葉を思い出して、ぐっと椅子を前に引き、だが、どうやっておぼえたらいいだろう。おら、きょうは、紙も鉛筆も、持って来なかったども、と、迷いつつも、主任のいった活字表を両の手でつかんで、じっとその字づらを見守った。しかもその反面、ひろの心の目は、主任そのひとへと走っていた。かれは、ひろから一間とは離れていない大机の前にひろと真反対の方向をむいてかけていた。

ぽきん、ぽきん。

やがてそういう音が、ひろの、右の耳からはいって来た。ひろがふりむいて見ると、主任の青白いすじの浮いた右手が、ピノキオという人形の、――ああ、あの人形の話をしてくれたのも鈴木トク先生であったのだと、ひろはふいに、涙をうかべて先生とピノキオを心によびおこした。――まったくその人形の指のように、それは自在に折れ曲がる都度、鳴っていたのだった。

とつぜんその主任が、机の上から、なにか白いものをつかんで椅子を立った。つぎのしゅんかん、台床に乱暴な靴音をさせてあがって来て、

「活字表、読めるかね」

と、ひろにきいた。

「あの、……読めるのもあるども、……」

「あるども、よめないのがあったらぼくに聞くんだ、さ、この紙で練習する、……」

主任は、欄外に三菱鉱業株式会社荒川鉱山と印刷した、罫のまったくはいっていない、ひろにははじめての、しっとりと柔い肌ざわりのタイプライター用紙と、芯の、いかにもやわらかそうな鉛筆を一本ひろに手渡すなり台床を降りて行った。

主任が降りて行ったことで、ひろは自分から、なにやら恐ろしい未知の火が、ようやく遠ざかってくれたかのような安心をおぼえた。それはそれだけ、ひろの全身が、これまでの鉱山暮しで味わって来た鉱山事務所というもの、庶務というもの、なかでも庶務主任というものが、ただならぬ憎えの源泉となっていたせいかもしれなかった。同時にそれは、この事務所にたたえている空気が、庶務主任上島の発散する香水やポマードのにおいもこめて、これまでのひろが吸って来た鉱夫飯場の汗垢のにおいとは、まったくかけちがったものであったせいかもしれなかった。どちらにせよひろは、庶務主任のいった「三千字」を一日も早くおぼえることで、その新しい世界での呼吸もつまるような緊張から、自分を解き放さなければならなかった。「おらァ、おぼえねば。まず、この紙っコで、……」しきりにひろは心でそういって自分をはげました。

やがてこの部屋が、そして事務所そのものが、出勤して来た社員たちの交す話し声や、かれらの間におかれた火鉢で燃えさかる木炭の熱気で蒸れはじめた。その熱気をかきわけて、主任をはじめ社員たちに朝の茶をくばりはじめる給仕たちの気配。また先刻から気ぜわしげな草履の音をさせて庶務と平行の衝立のあちらをとおりぬけ、鉱山長室へ

とはいってゆく老小使の松前さんの短く刈った白髪頭がひろの気を散らした。が、ひろの両眼は、すぐにも活字表にもどっていた。――拝、謹、啓、陳、者、益、貴、社、店、会、敬、具、――縦に、横に、びっしりならんだ表のなかの専用活字欄を手はじめに、ひろは一字一字タイプライター用紙の端から書きとって行った。

「字とか、言葉というものは、知識を刈りとる鎌だんだからな。おぼえられるときは、なるったけいっしょけんめいに、おぼえておくもんだ」そういっておしえてくれたのは高等科のときの佐藤作造先生であったな、と、思い出しながら。――御、座、候。被、申、致、可、不、成、相、如、何、居、無、之、有、難、仕、――

ひろは何度か母につれられて行った、上淀川の和田の家でみた、ほんとうの鎌のきらめきなども目にうかべ、まず専用活字から一級活字へ、さらにしだいに、二級、三級活字へと、書きとって行った。――蒙、厚、簡、……済、載、際、……継、権、険……礙、街、衙、――

そうして「礙」の字や「衙」の字の前までくると、とつぜんひろは手をとめた。

――あ、この字、おら、習わなかった。そうだ、主任さんにきくんだ、主任さんはさっき、おらの口まねして、「あるども、よめないのがあったらぼくにきくんだ」と、いっただから、……

だが、ふりむいて見るとその主任は、ひろのすぐ斜め後の副主任に、なにかを話しかけてわらっていた。そして、それだけで、ひろは気をぬかれた。だが、けっきょくひろは立ちあがった。するとひろの下で新しい上等の椅子の足が生きてでもいたかのように軋った。しかしひろはそのまま活字表をつかんで台床を降りると、あぶなくふらりと目まいが来そうになりながらも一気に主任に近づいてきいた。

「あの、この字、おら、分らねんすども」

そしてふるえている指さきで礙の字や衙の字をゆびさした。

「おら、分らねんすか」

主任がいった。

「その石へんにウタガウとある字は障ガイのガイだ。よく出てくるんだから憶えておき。それからその下のはクワンチョーとかクワンガのガだ、いいね」

ひろは運動会の障害物のガイは、このガイではなくてあの「害」であったどもな、と、ふと思い出し、またクワンガのクワンは、田さ水をやるときにいう灌漑などのクワン

だろうか、それとも、……と、思い迷った。が、それ以上を主任にききかえす勇気はついに搾り出せず、わずかに低く、はい、といって引きかえした。

このひろの上に、時間はおそろしくのろのろとすすんだ。

二

時間が場所によって、おそろしくのろのろとすすむということを、ひろは知るともなくこの鉱山事務所で知らされた。

やがてふと気づくと、そのときまで、庶務はもとよりこの事務所の玄関右手のいっかくいっかくを占める会計や用度、そして用度の背後の測量係の各部屋に波立っていたすべての話し声と物音が斗搔をかけられたようにしずまり、きこえるのはただ庶務の部屋と平行におかれた衝立のむこうにのぞいている柱時計の秒音と、この事務所の外界をとりまく操業地帯の、わーんというような機械の騒音の遠鳴りだけ。その、けだるい鎮もりをかきたてて、そのとき、きゅっ、きゅっという、ひろには初めての、いかにも弾みかえっているような靴音がきこえて来た。そしてその音が、すぐにも柱時計ののぞいている衝立のあちら側へ曲りこむやいなや、ひろをのぞく庶務係全員の尻が何程かずつ椅子から浮き、かれらの顔がいっせいに靴音の主へともちあがって、そのひとりひとりのノドからは「お早うございます」という声すらが洩れた。けれどもそのときは靴音の主の体が、半分鉱山長室へ、はいりかけていた。その半分はいりかけるところを、ひろはそおっと自分の目にとらえ、「あれは鉱山長だ」と自分にいった。「ついこのあいだ、おらたちの卒業式のとき学校さ来て、あんなりっぱな演説をした鉱山長だ。『……みなさん、労働は神聖であります。職業に貴賤はありません。現にわたくしが学んだアメリカでは、……』といった。――ンだども、いまあの鉱山長さ、『お早うございます』といった二人目の声は、たしかに庶務主任の声であったども、どっちの声も、なんとやさしい、かしこまった声であったろう。『お早うございます』……とてもおらなど、あったら声の真似できない」そう、ひろは自分にいって、自分に首をふっていた。

そのようにして、ついにこの、最初の長い半日が過ぎ去ったことを、やがてひろは、対岸の山のひとつの配電所で鳴らすサイレンの音で知らされた。

そのときだった。

「和田、お前、飯もって来たのが？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ふりむくとひろの一級上の卒業生の木内が、片手にヤカンをぶらさげ、つめ衿服の胸を挑むように突き出して、ひろのすぐうしろに立っていた。

「おら、きょうは、持って来なかったども、……」

ひろがこたえた。

「したら、早く、家さ行って食ってこい。それからお前の下駄、玄関さおかねえで、うらの土間さ、うつしておけ」

「うム」

ひろがこたえた。

「そしてこれからは、毎日、弁当もってくるだ。そうして弁当や下駄は、あっちの土間の棚さおいて、飯は、手が空いたら松前さんの部屋で食うだ。小使は、みんなそうしているだからな。それからお前だって、正午になったら、さっさとそれやめて、だんなさんがたさ、お茶出さねばならねえだ。おまえだって事務所の小使だべ」

それをいった木内の血色のいいほっぺたと腫れまぶたの目に怒りが宿っていた。

ひろは返事ができなかった。三千字がびっしりつまった活字表と、朝、庶務主任にいわれて三文判をおした薄い帖面の表紙に書かれていた「小使出勤簿」の五文字が、いまさら焼き鏝でもあてられるようにひろの胸に滲みわたった。

「おら、あしたからそうするから」

ひろがこたえた。

それでも怒りは納まらないというように木内は上草履を鳴らして隣りの会計の部屋へ引きかえして行った。

気がつくと、ひろのかたわらに庶務主任はいなかった。上島といっしょに去年転任になって来た副主任と古くからの社員たち、外廻りから帰って来た巡視たちが、めいめいの机に弁当をひろげていた。

「木内、妬けるんだ、和田に、な」

「ははははは、もう、か、……」

ひろの耳が係員たちの、その一言一言をききとがめた。

「お前だって小使だべ、か、ははは」

かれらが自分と木内をわらっているのだということが、ひろにもわかった。

ひろは走った。

飯場へ。

母親のもとへ。

途中で会った誰をも見ず、途中で見た何をも見返さず走った。

ひろは心のなかを縞のようになって走る思いを、そのく

せ子供心にとめていた。――おらのお母ァも、ちょうど、おらのお父さんが門鑑で死んだと聞いたとき、こんな具合に走ったんだ。――その思いは久しい前からひろをえぐり、何かのときにひろを酔わせる秘薬のようにひろの血管をへめぐりつづけていた。

ひろは走った。

大直利橋通りや大金通り、それから門鑑通りの長屋の母たちが、ときならぬこの時刻、雪解け水のはねかかるレールみちもかまいつけず走りもどるひろの思いつめたまなざしが判じ切れずいいかわした。

「なんでまた、あんなに走るもんだべか、あの童子は。……頭コええもんで事務所から白羽の矢が立ったような話であったどもな、死んだ小貫の話じゃな」

「ンだっけな。……まさかあの童子の生みの父親が死ぬ前々から事務所ににらまれていたことが、いまさらバレたでもねえべしよ」

てんでの訝りを口にのせて、目の前から遠ざかるひろのニコニコ絣の着物に赤緒のコマ下駄、ひたいすれすれにのっかった童女桃割れの揺れを追った。それはこのやまの、小学校生徒の通学姿そのままであった。

「ひろぼう、こと、なかったか」

飯場の戸口をまたぐなり、母親のりんがきいた。

「うム、なんも。……おら、ただ、飯食いに来ただ」

ひろはこたえた。

「そうが？」

りんの目は、しかしするどくひろをおそった。

「どういうこと、させられただ、きょうは？　機械はほんとに字ィ書く機械であっただな」

「ンだっけ」

「そうが。それではまず、えがったな」

そういう母に、ひろは心をしずめていった。

「おら、あしたから、弁当もって行って、年寄り小使の松前さんの部屋で食うだ。おら、あの事務所さ、小使で、やとわれただ」

「小使だと？」

りんがつぶやき、母子は黙った。

「そうが？」

沈黙を、母親のりんが破った。

「ンでも、おまえのやることは機械だべ」

「うム、……」

「そうが。……機械おぼえれ、機械、その、字ィ書く機械な。……そのうちきっと、東京から、兄ちゃも手紙よこす

べから、……兄ちゃが帰りさえすれば、おらだ三人、長屋コ暮しができるだからな、ひろぼう、……」
「うム」
「さ、飯食うべ、まま食うべ」
母子が湯漬け飯にむかった。白湯に漬けられた南京米飯が炉火にたらした煤だらけの鍋から、まっ白い湯気をあげていた。火床では金串に刺した塩鮭が白い塩玉を噴き出してこんがり焼け、たくあんは山吹いろに匂っていた。
ひとつの膳に母子二人分のそれをのせてりんはいった。
「さ、働いて食う飯の味はどったらもんだか、ひろぼう、食べてみれ」
――おらがタイピストどころか、ただの小使として事務所さやとわれても、お母ァはうれしいのだろうか。おらが、あの、字ぃ書く機械さ、手繰りついていさえすれば――
ひろは焼けるように熱い湯漬け飯とその疑問を、しょっぱい塩鮭といっしょに舌にころがしては呑みくだした。
「おまえだって、ひるまになったら社員たちさお茶出さねばならねえだ。お前、事務所の小使だべ？」
さっきの木内のその言葉と腫れまぶたがよみがえった。
――ンだ。――ひろは自分にいった。――おら、小使でもええ。ンだども、おら、お母ァのいうとおり、あの機械だけは、おぼえて呉る、そして銭コ。そして銭コとって、お母さもやって、そうして。――腹がくちくなるにつれて、ひろの心もふくれ出した。
飯場の台所の天井すれすれに穿たれた一枚ガラスの明り取りに、四月の陽が気ぜわしく翳っていた。
春風も鳴った。
ひろの心もさわぎ出した。
「ごちそうさん、お母ァ。あしたから、おら、弁当もって行くからな。小使はみんな、松前さんのとこで、飯食うだと、……」
「そうが、よし」
痛む腰を立ててりんも見送った。
「ンだども、あんまり走らねえで行け。もう早ァおまえは、学校の生徒ではねえだから」
「うん」

二章

一

小貫亡きあとの門鑑通りの飯場は、日陰の中根親方の子分が継ぐだろうと噂されたが、けっきょくそのとおりになった。継いだのは、りんにも憶えのある挽材夫の山屋という男だった。

「あの山屋なら、きっとやりとおすだ。なんと、頭、ええだから」と、鉱夫仲間もそれを当然とし、女房たちはそれにつけくわえて、「おりんさもな、二度目の菅井に死なれたあと、あの山屋とでも連れそっていれば、いまさら長屋コ借りる心配などしなくてもよかったによ。やっぱり東畑の姑は目が高かっただ」と、りんに代って山屋との縁を惜しんだ。

たしかに挽材夫の山屋は体格もがんじょう、顔つきも男男して、挽材の度胸と腕前では鉱山うちに知られ、すでに職頭となって、中根親方が世話した女房と、ズリ山寄りの長屋に世帯をもち、子も、もうけていた。

けれどもりんは、みじんこの男を惜しみはしなかった。

永年ねがいもとめて来た母子水入らずの長屋住居に、ひろが鉱山働きを決心してくれたいま移らないでどうするのかの一念で、こころが沸っていた。

くりかえされた戦後の不況と、それに先立ってこの山ふかい鉱山にまできこえてきたロシヤの「過激派」の噂や、そのあと今日につづく尼港の惨虐ばなしも、げんざいのりんがもっているそのねがいには先立つべくもなかった。

とはいえこの年月、なにかといえばかならず飯場へ顔を出してくれた江藤佐次郎先生や佐藤作造先生の、諸鉱山の争議にまつわる話や、時勢のうごきにふれた話は、りんの心の底ふかく沈澱し、それは豪雨や大風の日の沈澱槽の硫酸銅水のように、なにかの機会にりんの胸うちに波立った。小貫飯場のあとつぎが、挽材職頭の山屋にきまったからと金田巡視頭にきかされた日。前後して東京の義弟の東畑良造方に身をよせていた千太から、「アスキザン、センタ」の電報をうけとった日。そしてその千太がいよいよ帰

山して、鉱山の製煉所働きがきまった日。さらにいよいよ住みなれた小貫飯場をあとに、大金通りの影ノ沢長屋へと母子三人が引移る日にかけて、りんの胸うちの、その波がしらは高まった。

「ああ、こういう日が、いつ、おらさも来るかと思っていたら、とうとう来たでや」

りんはそのつど、自分に語りかけずにおれなかった。

そしてそういうときりんの空耳に、「ロシヤじゃなァ」という、一人の製煉夫の声がよみがえった。苗字を粟飯原といったが千葉県出身ということでチバ、チバとばかりよばれていた中年の飯場若衆であった。「ロシヤじゃなァ、皇帝ころして稼ぎ者が天下とったといわァ、……風呂場で誰かさ、横沢がいってただ、……」そう、かれは三年前の飯場の炉ばたで、悍馬の腹の皮のようにゴワついた肌を光らせながらわめいたのだった。その炉ばたにはまだ小貫もおり、久米治をはじめ何人かの若衆や、りんの子供らもいあわせたが、とたんに小貫の顔が不意の辱しめをでもうけたかのように赤ぐろく染まり、若衆や子供らの顔までが当惑をうかべて、面映ゆげに燃えた場があったのだった。

「あの、ほんとうにロシヤでは、そったらことがあったのだんすべか。稼ぎ者が、皇帝さまをころしただなんて」

後日になってから、思いつめたりんが、そうきいたとき、

「ころしたかどうかは分らねども、とにかく皇帝の政府たおしたというのはほんとだんすよ、お母さん。労働者が天下とったというのもほんとだんすよ。つまりとうとうロシヤじゃ、皇帝あまりひどいもんで、民衆が、ご性焼いて、……」

そうこたえてくれたのは、おりから飯場へ立ち寄った江藤佐次郎先生であった。

「つまりとうとう」

いまとなって、りんは心にくりかえした。

「おらは千治郎が死んでから、十四年がかりで、ようやっと、わが子二人と一戸かまえられることになったんだ。たとえ雨露しのぐだけの長屋っコでも」

二

あとつぎの山屋一家が、明日にも飯場へ引移るという今日であった。

りんは腰の痛みもかまいつけず、朝から自分ら母子の荷物まとめにとりかかった。

ふりかえれば二十年前、仲人の多吉が手綱とる馬トロで、自分の生き身といっしょに揺られて来た柳行李がただひとつと、この飯場に住み込んでこのかた日銭三銭五銭と差引かれながら母子が身をよこたえ、しまいには身銭を切って皮(布)を替え、綿も打ちかえて、どっちも吝い小貫夫婦の承認を得、ようやく自分らの私物にした飯場ぶとんが敷・掛それぞれ三枚ずつ。それにいよいよりん母子が、この飯場を引き揚げるときくなり駈けつけた、藤田や桜井ら、もと至誠会関係の女房たちと隣り近所、岩蔵夫婦がとどけてくれた所帯道具の一切と、子供らふたりがそれぞれ八年間、学校で習った本や帖面、先生から赤丸をつけてもらった習字や図画、通信簿、免状などのたぐいであったが、りんはまっさきにそれら子供の学校につながる物を手はじめに、ていねいにまとめあげ、つぎに炊事道具、つぎに柳行李へと手をかけた。

が、その柳行李が身も蓋も年月の垢で焦げ茶いろに染まり、縁や底の隅がすり切れている。その底へりんは古新聞を何重にも敷きかさね、名ばかりの一張羅をはじめとして、これまで洗いかえし縫いかえして保たせて来た衣類いっさいを、一枚一枚たしかめるようにしていれなおした。

そのなかに十四年前、佐野巡視頭のトビグチ棒の一撃でいのちを落した最初の夫千治郎が、湯灌のときまで身につけていたシャツ、股引のひと揃いも、きれいに土垢をおとされ、油紙につつまれてひそんでいた。子らにも見せない、りんの執念の形見だった。その形見に手がかかったとき、りんはあたりかまわずその上に身をたおして、千治郎！　とさけんだ。おらは、おまえさんとこそ、長屋さ、はいりたかった。たった一日でもいい、誰さも、気兼ねのない長屋さ。そうして親子水入らずで暮したかった。……千治郎、夢でもいいから、おらたち母子、大金通りの影ノ沢長屋さ行ったら、あらわれてけれ。……おらの体は片輪同様でも、もう、おらは、だれにも監視される身ではねえだからな。千太だって、ひろだって、きっとよろこぶだ、な。……

あらぬねがいをまで口にして、りんはたのんだ。

二十年前、二十二で、その千治郎に嫁いだりんは、いま四十二。

鉱山では四十二は男の厄年といわれ、この年を家族ぐるみで数え迎えてあらんかぎり祝った。しかし、祝ったあとと先を問わず、やまの男たちの寿命は、おおむねその時期を境に末路をたどった。しかも千治郎の場合はそれより九年も前に、わずかに三十三で畢ったのだった。いや、けっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.